

都心部における地域の担い手育成に関する考察

東京都千代田区神田地区での万灯制作体験を通じた地域資源共有の取り組み

担い手育成 地域資源 愛着形成
小学生 都心居住 神田

正会員 ○ 中村 慎吾* 同 浜田 愛*
同 小林 里瑛* 同 中島 伸**
同 松田季詩子*

1. 研究背景と目的

東京都千代田区神田地区は、江戸三大祭の1つに数えられる神田祭をはじめとする文化や、古くからの地域コミュニティ、創業100年を超える老舗といった地域資源が今なお残る地域である。しかしながら、近年の都心回帰の煽りを受けてマンションやビルの建設が活発化するなかで、こうした地域資源が失われゆくとともに、次代の地域の担い手が将来的に不足するという課題に直面している。次代の担い手を確保するには、住民の大半を占めるマンション住まいの新規住民をいかに地域に取り込むかが重要となるが、多くの新規住民は、地域社会に十分に馴染んでいない現状にある。

そこで、新規住民に対して、神田で培われてきた地域資源の共有を積極的に働きかけ、次代の担い手となるためのきっかけをつくることが求められている。本研究では、小学生に対する万灯制作体験を事例に、新規住民のなかでも地域との繋がりを形成するポテンシャルが高いファミリー層、とりわけ子どもに対する地域資源の共有のあり方について考察する。

2. 万灯制作体験を通じた地域資源共有の取り組み

2-1. 企画のねらいと万灯の位置づけ

子どもに対する地域資源共有の取り組みを行うにあたって、①ファミリー層の子どもおよび親に対する働きかけ、②子どもを取り巻く各主体間の連携構築の2つの観点について着目し、企画を実施した。

①に関して、子どもに対して地域資源の共有を図ることは前提であるが、いかにその共有をファミリー世帯の単位にまで波及させるかという視点も重要となる。

②に関して、継続的に子どもに対して地域資源を共有するという視点に立った際、地域が自発的に取り組みを行える体制を構築することは重要である。

そうした狙いのもと、子どもに対して身体的な体験を提供するとともに、子どもを取り巻く主体の積極的な連携を促すことのできるプログラムを検討した結果、万灯の制作体験を実施する運びとなった。

2-2. 企画概要

万灯とは、直方体の木枠に紙を張り、下に長い柄をつけて捧げ持つ祭道具である。神田祭においても万灯は一部の町会で使われており、かつて子どもが万灯をつくった事例も存在している。

今回、この万灯という地域資源を活用した体験活動を通じて子どもの神田祭や地域に対する理解を深めることを

目的として、万灯制作に関するワークショップを実施した。

万灯制作は「万灯づくりワークショップ」と「万灯飾り付けワークショップ」の2工程に分割し、それぞれ千代田区立千代田小学校と小学校併設の学童保育所で実施した。

小学校での「万灯づくりワークショップ」は、小学3年生の社会科における地域学習の一環として、小学校と協同して実施したものである。約30名の3年児童は、祭りの様子や神輿の絵を事前に描いた障子紙を木枠に張り、その木枠に全長1メートル余りの柄を取り付ける工程を体験した。また、万灯の役割や祭での使い方について、祭りの担い手となっている地域住民からレクチャーを受ける時間も設けた。

一方、学童保育所での「万灯飾り付けワークショップ」は、余暇活動の一環として、学童保育所と協同して実施したものである。小学校で組み立てまで行った万灯に花飾りを付けるという内容で、低学年から中学年にかけての計60名余りの児童は、小学校における万灯づくりワークショップで制作された万灯に手製の花飾りを取り付ける工程を体験した。

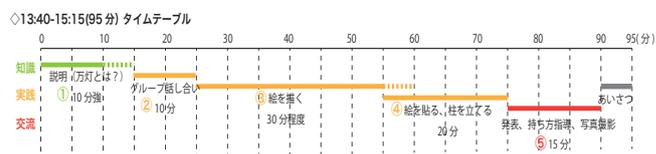


図2 万灯づくりワークショップのタイムスケジュール



図3 小学校で制作した万灯



図4 飾り付け後の万灯

2-3. 成果

本章では、万灯制作体験によって、①ファミリー層の子どもおよび親に対する直接的な働きかけと、②子どもを取り巻く主体間の関係構築がなされたかについて検証を行う。

Consideration of developing district leaders in the city center
Practical research on shareing local resources
through making festival tools in Kanda, Tokyo

Shingo NAKAMURA, Risa KOBAYASHI, Kishiko MATSUDA,
Megumi HAMADA, Shin NAKAJIMA

①子どもおよび親に対する働きかけ

もともと子どもの神田祭に対する関心や認知度は低く、小学校教諭による事前のアンケートでは、神田祭について知っているという回答した児童は3年生全体の33%、また、家族が神田祭に何等かの関わりを有していると回答した児童は7%に留まっていた。しかしながら、万灯づくりワークショップの終了後、小学3年生の児童28人にアンケートを行い、神田祭に対する参加意欲を問うたところ、「神田祭に参加したい」「万灯を神田祭で持てみたい」と回答した児童はそれぞれ全体の79%を占めた。

以上の結果から、子どもの神田祭に対する関心および主体的な参加意欲の向上が確認された点において、万灯づくりという体験を通じた地域学習プログラムは効果があったといえる。

また、「(万灯づくりワークショップ等の)学習を通して、神田祭のことを保護者に話したか」という問いに対しては、86%の児童が「話をした」と回答しており、子どもが自然に親に地域資源を伝えていることも示された。

このことから、万灯制作体験を通じた地域資源の共有は子どものみならず保護者に対してなされていると捉えられる。

②主体間の関係構築

小学校での万灯づくりワークショップでは、神田祭に関する授業を行うにあたって地域の住民との接点を探っていた小学校側と、子どもの代に祭りを受け継いでゆく必要性を感じていた旧来住民側とが結びつき、両者のニーズを満たすプログラムが実現した。

このように子供を取り巻く主体が関係を深めてゆくことは、子どもを地域で育てることに繋がり、次代の担い手づくりに貢献するところがあると考えられる。

4. まとめ：地域の担い手づくりに向けて

次代の担い手育成を行うにあたって、地域資源の共有から地域に関心を持ってもらう教育プログラムとして、今回の万灯制作体験を実施した。

そうしたプログラムを運営してゆくうえで、新たに転入してきたファミリー層をはじめとする若い世代が主たるターゲットとなるが、新規住民は町会等の地域コミュニティに属さない場合も多いため、彼らに直接的な働きかけをすることは難しいという現状にある。

一方で、新規ファミリー層のうち、子どもに対しては、小学校や学童保育所といった教育・保育機関における地域資源学習のなかでその働きかけを行うことは比較的容易であるうえ、児童は物事に対する愛着形成にあたって重要なステージにあることから、児童に対して地域資源を身体的に感じとる機会を提供することは、次代の担い手として育てるうえで有効である。さらに、子どもが授業内容に興味を持ち、家族にその経験を伝えたり、積極的に地域のイベント等に家族を連れ出したりすることで、親世代にも地域資源の共有をもたらすことが可能である。このような点において、子どもには、新たに地域に転入してきたファミリー層の親世代と地域との間の橋渡し役も期待することができる。

以上に述べたような子どもの果たし得る役割の大きさを踏まえると、新規のファミリー層と地域とを繋げ、次代の担い手を育成するには、教育・保育機関が地域資源の共有に関する体験型プログラムを推進することが有効な方策として考えられる。とはいえ、小学校や学童保育所としては、通常のカリキュラムの範疇を越えて地域学習を展開することには限界があることに加え、小学校では教職員が定期的に異動することから、地域との密接な関係を長期的に継続するには課題も多い。そのため、地域住民全体で教育・保育機関の地域学習プログラムをサポートする体制が重要となる。

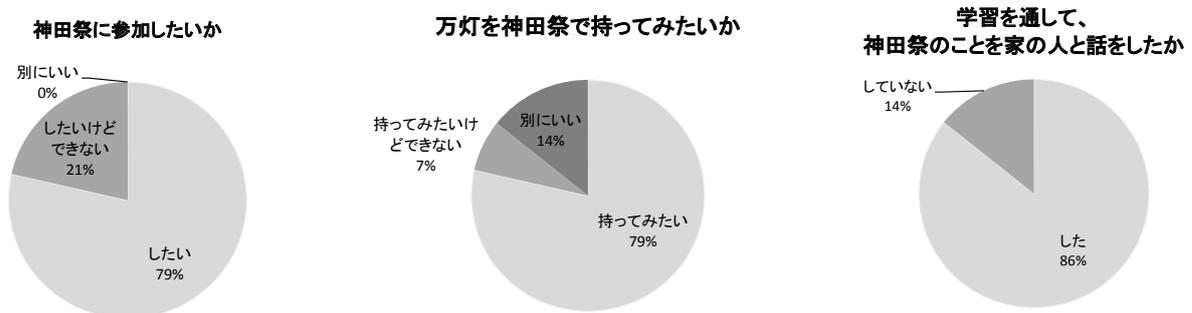


図5 3年生児童に対するアンケートの結果

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程

** 東京都市大学都市生活学部 講師・博士(工学)

*Master Course, Dept of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo

**Lecturer, Faculty of Urban Life Studies, Tokyo City Univ.